

「教育臨床総合研究15 2016研究」

鍵盤ハーモニカの運指の定着を目指した授業実践研究

A practical classroom study aimed at establishing keyboard harmonica fingering

平塚 菜津美* 島 畑 齊**
Natsumi HIRATSUKA Hitoshi SHIMAHATA

要 旨

今日までに報告されてきた小学校音楽科の「器楽」分野の授業に関する研究によると、鍵盤ハーモニカの演奏技術に児童間で差が生じていることが明らかとなっている。鍵盤という同じようなメカニズムをもつピアノ演奏においては、正しい運指の定着は必要不可欠であると考えられている。そこで本稿では、小学校音楽科における鍵盤ハーモニカの学習に関する運指の定着を目指した新たな指導法の可能性について考察を行う。

〔キーワード〕 小学校音楽科 器楽 鍵盤ハーモニカ 運指

I はじめに

1977年に改訂された小学校音楽科の学習指導要領では、第1学年および第2学年で取り扱われるハーモニカならびに第2学年のオルガンについては、他の同種の楽器に代替することが認められた。大和が、鍵盤ハーモニカはハーモニカに最も近く学年の実態にも合った楽器である(大和, 1977)と述べているように、ハーモニカの代替楽器として鍵盤ハーモニカが次第に学校現場に普及していった。また嶋田によると、鍵盤ハーモニカが小学校教科書に採用された1970年代当初は小学校高学年で採用され、現在のように低学年で使用されるのは、1980年前後になってからであると指摘されている(嶋田, 2010)。

近年では、小学校低学年で使用されることの多い鍵盤ハーモニカであるが、その指導法に関する資料や文献、先行研究を調査していくと、就学前教育としても鍵盤ハーモニカが扱われる場合が多いことが分かった。谷村・門脇(2012)が大阪府内の幼稚園教諭、保育士を対象に行った2012年のアンケートによると、約7割の園が鍵盤ハーモニカを使用している実態が明らかになった。そこでの就学前教育として扱う理由には、①小学校に入ってからスムーズに音楽に興味を持って欲しい、②音楽に興味をもてる時間が作れる、などの内容が挙げられた(谷村・門脇, 2012)。これらの取り組みは、園児が就学後に音楽の授業にスムーズに取り組めるとも考えられる一方で、指導を受けてこなかった児童との間で経験差が生じてしまうことが問題であろう。

*元島根大学大学院教育学研究科教育内容開発専攻

**島根大学教育学部芸術表現教育講座

実際に、木村・古寺が行った、小学校音楽科の授業における指導についての調査では、現場で指導する教師が、児童の個人差に幅があることに問題意識を持っていることが報告されており（木村・古寺，2014）岡本によっても、入学時において既に児童の鍵盤ハーモニカの技術に差が生まれているといった内容が報告されている（岡本，2009）。一斉授業の場において、児童間に経験差がある場合、一部の児童に苦手意識を生むのは想像に難くない。いかなる手段を用いても「できる」「できない」が見えてしまう器楽の内容においては、教師が、児童に経験差による苦手意識を持たせないような工夫を行うことが必要とされる。

芳賀は、小学校現場において鍵盤ハーモニカの練習に取り組む際には、児童各自の自己学習が意欲的に行われないと活動は成立せず、そこで必要となるのが指導法やツールの工夫であると述べている（芳賀，2015）。この指摘のように、30人ほどの児童に対し、教師が一人で行う通常の授業では、児童一人ひとりに対し十分な個別指導を行うことが難しいため、指導法や教材作成の工夫がより一層必要不可欠となる。

今日までにも、鍵盤ハーモニカの指導法に関する研究は報告されてきた。しかし、先述したように、児童間に技能差が生じているというような課題も報告されていることから、これまでに報告されてきた指導法を、別の視点から考える必要性も見えてくる。鍵盤という同じようなメカニズムをもつピアノ演奏においては、正しい運指の定着は必要不可欠であると考えられている。このことから、鍵盤ハーモニカの学習において、運指に着目した指導法を考案することが、児童の演奏技術の向上につながり、児童間に生じる技能差を埋めることにつながるのではないかと考えた。

そこで、本研究では、運指に着目した指導法の考案及び教材作成を、教科書教材に沿って考案し、授業実践を継続することによってその効果を考察することを特色としたい。研究方法は、一、鍵盤ハーモニカに関する先行研究の考察、二、運指の定着を目指した指導法の考案、三、授業実践によるその成果の検証の3点を中心に進める。

II 鍵盤ハーモニカに関する先行研究の考察

今日までに音楽科における「器楽」の指導法については多くの課題が報告されてきた。そこで、芳賀（2015）、木村・古寺（2014）により指摘された問題点を整理し検討した。結果、次のような点が主要な問題として明らかとなった。

- ・一斉授業の場で、教師が児童一人ひとりの習熟度や個々の状況を把握することが難しい。
- ・技能差が生じている児童に対して、十分な個別指導を行うことが難しいため、児童によっては、演奏できないまま学習を終えてしまう。
- ・鍵盤ハーモニカが苦手な児童に学習内容を合わせた授業を行うと、内容が簡単になってしまい、反対に、得意な児童のやりがいや薄くなってしまふ。

これらのなかでも、特に、「児童間に技能差が生じる」という点について着目し、その解決に向けた新たな指導法を模索するために、今日までに提示されてきた指導法の分析を行った。その結果、小学校教育を対象とした鍵盤ハーモニカの指導法について、詳細な提示がされているものや指導例の効果について検証したものは数少ないことが分かってきた。しかし、その数少ない研究の中でも、一斉授業において個別指導に徹した指導法については、平田（2007）に

より既に有用性を示した研究が報告されていることから、本稿では一斉授業の中で、学級全体を対象とした新たな指導法を考案する必要性を見出した。

Ⅲ 運指に着目をした指導を行う意義

鍵盤ハーモニカは、遠藤（1999）が指摘するように一般的に鍵盤を有するという構造からすると鍵盤楽器として分類できるが、息を吹き入れてリードを振動させ、音を出すという点ではリード楽器の仲間であるといえる。なかでも本稿では、運指という鍵盤楽器としての特徴に着目をし、研究を進めてきた。そのため、鍵盤楽器である、ピアノ教育において実践されている指導法を参考にすると有用性を感じた。

1. ピアノ演奏における運指の位置づけ

ピアノ演奏において運指は必要不可欠なものとされている。今日使用されている運指法は「ドイツ式」と呼ばれ、1 2 3 4 5の数字で表され、両手とも1が親指で5が小指を示すといったものである。ピアノ奏法において、正しい運指が定着しないまま演奏することで、次のような問題が生じる、と中島は述べている。

- ① 腱鞘炎などの運動機能障害で指や腕を痛める
- ② 連続した運指のときに、違和感のあるリズムになってしまう
- ③ 指の動きに変わった癖がつく
- ④ 音楽的に無理のある表現になる
- ⑤ 逆のアクセントが無意識のうちにつく
- ⑥ 逆の拍子感となる
- ⑦ 音楽が自然に流れない

(中島, 2009, p.96)

これらは、ピアノ奏法においての内容であるが、鍵盤ハーモニカにおいても、②、③、④、⑦の項目などに関しては、同様のことがいえるであろう。また、中島は、運指法について、各個人の指の状態と運動機能を考えた運指法を用いた場合、かなりの確立で安定した演奏ができるようになると指摘している（中島, 2009）。さらに、下山も、ピアノ演奏における技巧の根幹は、運指法にあると述べている（下山, 1986）。

つまり、運指を見直すことにより、ピアノでの演奏上の諸問題（ミスタッチや音楽が不自然な流れとなるなど）を解決できる可能性があるということである。筆者自身も、ピアノ演奏を続ける中で数々の問題に直面してきたが、運指を見直すことで解決することのできた問題は多々ある。このように、先述した中島、下山両者の指摘のように、ピアノを演奏する場合に合理的な運指というものは、必要不可欠であるといっても過言ではない。

さらに、ピアノ教育の導入時においても、運指の学習は必ず取り上げられる項目である。ラストは、運指学習について、運指の習慣が形成されるのは初歩の段階であることを指摘している（ラスト, 1972）。つまり、よい指使いを身につけるためには、導入期からの学習が欠かせ

ないということである。

2. 運指の決定方法

ピアノ教育における初歩の導入教材は、一般的にドは1、レは2といったように、ドからソの各音を1-5の各指と対応させる技能を習得する内容が多い。しかし、学習段階が進むと、手のポジション移動や「指くぐり」、「指またぎ」といった技能が必要となってくる。そのような場合には、運指のパターンは必ずしも一つとは限らない。武内は、5本の指をいかに無駄なく合理的に弾きやすく配置するかというのが運指法のコアであると述べている（武内，2014）。このように、運指を考える際には演奏者自身の手や指などの身体条件を考えなければならず、合理的な運指というのは一人ひとり違ってくるものである。そのため、常に楽譜に示された指番号が自身にとって最善のものとは限らず、ピアノを学習していくなかで、ある程度の段階が進むと、自分自身に合った運指を考案していくようになる。ラストが、「指使いを選ぶ際、教師とともに生徒に考えさせるようにすることはよいことである。」（ラスト，1972，p.90）と述べているように、学習者が導入期から運指について学び、段階を踏んで思考することによって、自ら運指を考案することができるようになるのである。

3. 鍵盤ハーモニカの学習における運指指導の在り方

先述したように、ピアノ演奏では、運指は必要不可欠な技能とされているため、導入期の教育から運指の指導がなされている。

一方、小学校教育の場で扱われている教科書教材を分析すると、第1学年の教科書では、5度の音域の範囲で演奏できるものが主であるが、第2学年になると、手のポジション移動により、より難易度の高い運指が必要となる。ピアノ教育の場においてラストは、5度の音域や5指ポジション¹⁾の範囲をこえたときに始めて、子供たちに運指の問題が生じることを指摘している（ラスト，1972）。このような指摘を念頭におき考えてみると、小学校教育の場においても、5指ポジションで対応できない音域の広い教材に移った際には、苦心する児童が増えることは想像に難くない。

先述した、ラストの「生徒自身に指使いを考えさせることがよい」という指摘を参考にすると、児童が教師から与えられた運指を守って演奏するだけでなく、自分自身で運指について意識したり、考える過程を経ることがその定着につながると推測される。しかし、今日までに報告されている先行研究に提示された鍵盤ハーモニカの指導法のなかには、児童自身で思考するような指導例は見られなかった。

そこで、本研究では、児童自らが運指について思考し探究するような指導法の一例を提示し、授業において実践を試みた。次節では、その内容をまとめ、指導法の効果について検証する。

IV 第2学年における授業実践

本授業実践は、島根大学教育学研究科の「学校教育実践研究」の一環として、島根大学教育学部附属小学校、第2学年2組で実施した。

1. 教材作成及び学習形態の工夫

運指に着目をした指導法の考案をするにあたり、教材作成の工夫や学習形態の工夫を行なった。

(1) 運指について関心をもたせる教材開発

授業の中で、【写真1】のような教材を用いて、運指が教科書に記載されていない部分などを中心に、児童自らに運指を考えさせる活動を取り入れた。また、各自で考える活動に終始するのではなく、児童個人の考えを学級全体で共有し、運指のパターンが必ずしも一つではないことに気がつかせることで、運指への関心を持たせたいと考えた。また、【写真1】の教材には、1～5の丸い指番号シールの裏にマグネットを付けたことで、貼ったり剥がしたりしながら試行錯誤することができるよう工夫を行なった。

(2) 運指や手のポジション移動の技術獲得を目指した教材開発

児童の中には音域が広がったことなどにより、鍵盤上での手のポジション移動に苦心している姿も見受けられた。そこで、移動が必要な箇所には、各音ごとに指の配置を鍵盤図の中に示した【写真2】のような教材を作成した。また、学級で運指について考えた際に、全体で同じ運指にするのではなく、最終的には児童が各自で弾きやすい指使いを工夫し、選択することができるようにした。このような工夫をすることで、個人での練習活動がよりスムーズに行くことをねらった。



【写真1】児童に運指を考えさせる教材



【写真2】各音と指の対応を示した教材

(3) 学習形態の工夫

授業展開の中に、ペア形態の学習を取り入れることを試みた。ペア形態での学習を行うことは、教師が児童の教え合う姿を客観的に観察することができ、個別の習熟状況を把握することにもつながる。また、鍵盤ハーモニカを苦手とする児童に実態を合わせた授業を行うと、得意とする児童のやりがいや薄くなってしまおうといった問題も予測される。得意とする児童が友達に教えることで、児童相互で運指のパターンを試行錯誤しながら学習をすることができ、学級全体の技術を高めることにつながるのではないかと推測した。

2. 授業の概要

題材名 曲の様子を思い浮かべながら演奏しよう

題材のねらい

- ・音色やリズムに気を付けながら、楽曲を演奏することができる。
- ・楽曲の気分を感じ取りながら、思いをもって演奏することができる。

対 象 島根大学教育学部附属小学校 第2学年2組

実施日 平成26年11月10日(月) 2校時, 12月8日(月) 2校時

12月15日(月) 2校時

附属小学校指導教員 神門洋子教諭

(1) 題材について

本題材は3時間で構成する。鍵盤ハーモニカの奏法の指導に重点をおきながら、児童が思いをもって演奏できるようになることを目指している。1時間目では、本題材で扱う「小ぎつね」の歌詞から小ぎつねの気持ちを考える活動を中心に行い、曲のイメージを感じ取らせることに重点をおく。その後、2, 3時間目では、運指についての学習、実践練習を行う。

一人で演奏するだけでなく、友達と合わせて演奏する活動を通して、友達との楽しい関わり合いの中から、児童が技能面で向上できるような指導法を展開したいと考えた。

(2) 評価計画

評価の観点と評価基準

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽表現の創意工夫	ウ 音楽表現の技能	エ 鑑賞の能力
歌唱				
器楽	○	○	○	
音楽づくり				
鑑賞				

題材に即した具体的評価基準

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽表現の創意工夫	ウ 音楽表現の技能
題材の評価基準	・鍵盤ハーモニカを演奏することに楽しんで取り組んでおり、進んで演奏したりしようとしている。	・曲の雰囲気を感じ取りながら、演奏の仕方を工夫しようとしている。	・運指について考えたり、工夫したりすることができる。 ・友達と合わせて演奏することができる。
学習活動に即した具体的評価基準	・鍵盤ハーモニカを演奏することに、意欲的に取り組んでいる。	・「小ぎつね」の歌詞から曲のようすを感じ取ろうとしている。	・自分なりに運指について考えてみるすることができる。 ・友達と合わせて演奏する中で、友達の音を聴きながら演奏することができる。

題材の指導と評価計画 (全3時間)

次	時	ねらい	主な学習活動	評価	評価の方法
1	1	曲のイメージを感じ取ることができる。 楽曲の特徴に気が付き、表現の工夫につなげることができる。	・参考音源を聴く。 ・歌詞唱・階名唱を通して曲の雰囲気を感じ取る。 ・「小ぎつね」の歌詞から曲の場面のようすについて考える。	アイ	・発表 ・観察
2	2	運指を考え、鍵盤ハーモニカで演奏することができる。	・曲の中で、フレーズごとに運指について考える。 ・考えた運指で演奏できるように練習をする。	アウ	・発表 ・観察
	3	指使いを自分自身で考え、鍵盤ハーモニカで演奏することができる。	・前時で考えた1段目、2段目の指使いをもとに、3段目の指使いを考える。 ・考えた指使いをもとに練習をする。	アウ	・発表 ・ワークシート

(3) 授業の実際と児童の様子

—1時間目—

導入として「小ぎつね」のCDを聴かせた。その後、伴奏に合わせて、筆者自身が鍵盤ハーモニカを演奏した。その際に、児童にわかりやすいように、繰り返しの部分に強弱の変化を付けるようにした。児童がその点に気がつくように発問をすると、「1回目が小さくて2回目が大きい！」などの反応があった。

次に歌詞の表す情景や「小ぎつね」の気持ちについて考える活動を行なった。1～3番の歌詞を朗読し、季節の移り変わりや、「小ぎつね」の気持ちについて考えた。最後に「小ぎつね」の気持ちを考えながら歌唱した。

[考察]

「歌詞の表す情景や小ぎつねの気持ちを考えてみよう」という発問に対して、多くの意見が出てきた。しかし、「小ぎつね」の気持ちを考えながら歌唱を行う活動に移ると、歌詞の内容から歌唱の表現を工夫する児童もいたが、どのように表現を工夫したら良いか苦心している児童の姿も見受けられた。解決策として、歌詞から感じ取ったことを言葉だけでなく体で表現する活動も取り入れたり、感じ取ったことをもとに様々な表現を試す時間も授業の中に取り入れることで、より表現を工夫することにつながられたのではないかと考えた。

—2時間目—

導入として前時の振り返りを行なった。その後、音符に付されている番号について、「この番号ってなんだろう」と発問した。児童の中にはすでに指番号について知っている児童もいた。指の番号を確認した後に、「小ぎつね」の運指について部分的に学級全体で考えた。Ⅳ-1-(1)で考案した教材を使い、【写真3】のように、いくつかの運指のパターンをクラス全体で共有する場を設定した。

[考察]

運指を考える活動では、1つのパターンにとらわれることなく、いくつかの運指のパターンが出てきたため、授業時間的に楽譜の2段目までしか考えることができなかった。本時の授業では、「こぎつね」の1段目のソの音の指番号について児童の中で意見が分かれ、児童の提案した運指を学級で試してみる時間を多く設けた。しかし一方で、「こぎつね」の中に出てくる2つの一点ハ音と二点ハ音の高さの区別がついていない児童もいることがわかった。

今回の授業ではどのように運指を考えるかについての筆者自身の説明が足りなかったため、予想を超えた様々なパターンが出てきてしまった。例えば指を反対にくぐらせる、必要のない場所で手のポジションを変えるなど。そのため、最終的にどの運指で弾けば良いのか分からないまま授業を終えてしまった児童も多かった。

— 3 時間目 —

前時に学習をした指番号について復習を行ない、前時は2段目までしか指番号を考えることができなかったため、本時では3段目を学習した。また、「こぎつね」の運指を考える上での決まり事（手を返して弾かない、隣接した指で音を飛び越さないなど）を提示した。

その後、本時のめあて「自分の考えた指使いでこぎつねを弾いてみよう」を確認した。Ⅳ-1-(2)で考案した教材では、前回学級で意見の別れた1段目のソの音と、3段目の最後の2小節のみに部分を絞り、ワークシートに自分で考えた指使いを書き込む活動を行なった。その後、ペア形態による学習を行い、児童相互で教え合いの場を設けた。授業の終わりには、【写真4】のように児童一人ひとりが自分で考えた運指で演奏を行なった。

[考察]

運指の考え方を説明することで、児童各自で運指を考える活動につなげることができたと思う。また、ペア形態の学習を取り入れることで、「友達に教えてもらうことができ、できなかったところができるようになった」などの発言も聞けた。最後にクラス全員で演奏した場面では、音の間違いが減り、児童各自の習熟度の高まりが伺えた。



【写真3】クラスで運指について考えている場面



【写真4】個人で演奏している様子

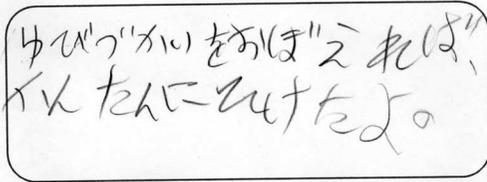
(4) 第2学年における授業の成果と課題

全3時間の授業実践を通して、本研究の目的につながる、児童の運指への関心を促すことはできた。資料1~2のワークシート「IV-1-(2)で開発した教材」を見ると、児童が自分なりに運指を試行錯誤した姿が見受けられ、児童の振り返りからも「指使いを覚えたら簡単に弾けたよ」「指使いが守れた」といった声を聞くことができた。



【資料1】 児童Aのワークシート

ふりかえり



【資料3】 児童Cのふりかえり



【資料3】 児童Cのふりかえり

一方で「手のおひっこしが難しかった」といった児童の苦心する姿もあり、3時間の授業では、運指の定着までには至らなかったように思われる。運指が定着するまでには、ある程度の期間、そして継続的な指導が必要不可欠であることが課題として浮き彫りとなった。

また、児童の負担を考え、児童が「こぎつね」の運指を考察する箇所を部分的に絞った。しかし、児童が運指を考えるにはかなりの時間が必要となり、鍵盤ハーモニカを演奏する時間が少なくなってしまうといった問題も生じた。これらの課題を踏まえ、筆者は鍵盤ハーモニカの導入時である第1学年の段階から、児童が運指に対して興味や関心を持てるような指導が重要だと考えた。それによって第2学年で教材が難しくなった際にも、児童がスムーズに取り組めると考えられる。第1学年の教材は、ドが1、レが2というように、5本の各指とドからソの各音を対応させて弾く教材が主である。Ⅲ-2で運指の決定方法について詳述したように、導入期である第1学年の際に、これら各音と各指の対応を理解させることで、第2学年になった際に手のポジション移動が必要になるような教材においても児童が応用できるようになるのではないかと推察した。そこで、第1学年の授業を行うにあたり、以下の点を目的とし授業を行うこととした。

- ・第1学年の導入期から、運指に関して、自ら考える活動を設けることで、児童の運指への関心を高める内容にする。
- ・ドが1、レが2というように、5本の各指とドからソの各音を対応させて弾くことができる

ことを目指した授業内容とする。

次節では、第1学年で行なった授業実践例について考察をする。

V 第1学年における授業実践

本節では、第1学年において行った授業実践についてまとめる。なお、本実践では前節で明らかとなった課題をふまえ、継続的な授業実践を行なった成果についても言及する必要があるため、島根大学教育学部附属小学校、同校神門洋子教諭からの協力のもと、長期にわたり授業実践をさせて頂いた。

1. 授業の概要

[取り扱った教材名]

「ゆびあそびの うた」 土佐ちえこ 作詞／杉本竜一 作曲

「どんぐりさんの おうち」 久野静夫 作詞／市川都志春 作曲

「たのしく ふこう」 鹿谷美緒子 作詞・作曲

「どれみで あいさつ」 長谷部匡俊 作曲

「なかよし」 海野洋司 作詞／佐井孝彰 作曲

本稿では、教科書教材を取り扱う中で運指に着目をした授業を展開することを特色とした。そのため、取り扱った教材は現行の教育芸術社2015年度用の教科書から使用した。「ゆびあそびの うた」に関しては、2011年度用の教科書では取り扱われているが、現行の教科書においては掲載されていない。しかし、運指に着目をした本実践においては、指を動かすトレーニングにつながることや、運指に興味を持つきっかけにもなると考えたため、鍵盤ハーモニカの学習に入る前段階に「ゆびあそびの うた」を取り扱うこととした。

[対象] 島根大学教育学部附属小学校 第1学年1組

[授業実践日] 平成27年7月1日～11月10日の12日間。

本稿では、なかでも特に運指の学習を行った題材「どれみの位置を覚えて吹こう」の授業実践について絞って取り上げ、新たな運指の指導法を用いた授業実践の一例を提示した。

題材名 どれみの位置を覚えて吹こう

題材のねらい

- ・ 指番号について理解することができ、指使いを守って弾くことに進んで取り組んでいる。
- ・ 曲の中で正しい指使いを使うことができる。

実施日 平成27年10月7日（水）3校時，10月21日（水）3校時，10月27日（火）
2校時

(1) 題材について

本題材で扱う「どれみであいさつ」は、長谷部匡俊によって作曲されたものである。曲の名前にもあるように、ドレミの3音のみを使って作られた作品である。4小節のうち、最後の小節以外は、すべての小節が隣り合う音でできている点などが、児童にとって無理なく取り組むことができる導入教材の一つであると考えられる。また、この題材を扱う際に、児童は初めて指番号、運指について学習することとなる。今後、技術的に難しい作品に移行した際に指番号や、運指の定着は必要不可欠となる。そのため、「指くぐり」や「指またぎ」、手のポジション移動を必要としない段階から、指番号や運指の定着を目指した指導を行なっていきたい。

(2) 評価計画

評価の観点と評価規準

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽表現の創意工夫	ウ 音楽表現の技能	エ 鑑賞の能力
歌唱				
器楽	○		○	
音楽づくり				
鑑賞				

題材に即した具体の評価規準

	ア 音楽への関心・意欲・態度	ウ 音楽表現の技能
題材の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・ 鍵盤ハーモニカを演奏することに楽しんで取り組んでおり、進んで演奏しようとしている。 ・ 指使いを守ることを意識しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指番号について理解することができる。 ・ 正しい指使いを守って演奏することができる。
学習活動に即した具体の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・ 鍵盤ハーモニカを演奏することに意欲的に取り組み。 ・ 1音ずつ指番号を守って弾くことに進んで取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 題材「どれみであいさつ」では、指使いを理解し、しい運指で弾くことができる。 ・ 1小節目の指使いをもとに、2小節目の指使いを考えるなど、自らで運指について思考することができる。 ・ 曲を通した際にも、正しい運指を守って弾くことができる。

題材の指導と評価計画（全3時間構成，1時間目のみ20分構成）

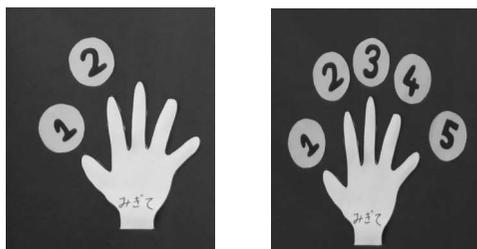
次	時	ねらい	主な学習内容	評価	評価方法
1	1	<ul style="list-style-type: none"> 指使いについて理解することができる。 「ドレミ」「ミレド」の順次進行の音形を正しい指使いで弾くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教材「どれみで あいさつ」の音の上に出てくる数字の意味について考える。 指番号について学習をする。 1音ずつ，楽譜に記載された指使いで演奏する。 1小節ずつ正しい指使いでつなげて演奏する。 	ア ウ	<ul style="list-style-type: none"> 観察 ビデオ分析
	2	<ul style="list-style-type: none"> 運指について考えることができる。 正しい指使いを守り，3小節目と4小節目を演奏することができる。 前時に学習をした1，2小節も合わせて曲全体を通して演奏することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの復習を行う。（指番号など） 3小節目，4小節目の指使いを考え，演奏する。 各小節をつなげて演奏できるようにした後に，曲全体を通して演奏できるようにする。 	ア ウ	<ul style="list-style-type: none"> 観察 ビデオ分析 ワークシート
2	3	<ul style="list-style-type: none"> 前時までに学習したことを生かし，「どれみのまねっこ」を鍵盤ハーモニカで演奏することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 学級を4つのグループに分け，「どれみであいさつ」のリレー演奏を行う。 「どれみのまねっこ」を行う。 	ア ウ	<ul style="list-style-type: none"> 観察 ビデオ分析

(3) 授業の実際と児童の様子

— 1時間目 —

本時は運指の学習への導入であった。

授業の導入部分ではドレミソの音の確認を行なった。その後，教材「どれみで あいさつ」を扱い，この楽曲で扱われている音の種類を確認し，ドレミの3音からできていることを理解した。その後，児童に「音符の上にかかれている数字はなにかな」と発問をすると，児童からも「指の番号」などとの発言があり，すでに知っている児童もいたが，【写真5】のように全体で学習を行なった。その後，教材「どれみであいさつ」の2小節「ドレミ」「ミレド」を練習した。多くの児童が指番号について理解し，達成できている姿が目視やビデオの授業記録によって把握できた。児童のなかには，指番号については理解できているが，曲の中で演奏してみるとなると，運指が定着しない児童の姿も見受けられたので，次回の授業でもう一度指番号の確認を行いたい。



【写真5】指の番号を黒板で確認している場面

その後，教材「どれみであいさつ」の2小節「ドレミ」「ミレド」を練習した。多くの児童が指番号について理解し，達成できている姿が目視やビデオの授業記録によって把握できた。児童のなかには，指番号については理解できているが，曲の中で演奏してみるとなると，運指が定着しない児童の姿も見受けられたので，次回の授業でもう一度指番号の確認を行いたい。

— 2 時間目 —

「どれみで あいさつ」の歌唱を行なった。前時までに学習したことを児童に聞くと「指番号を勉強した」「ドはお父さん指、レはお母さん指、ミはお兄さん指、ファはお姉さん指、ソは赤ちゃん指」と発言があった。黒板上で、指の番号を貼ってもらい、全体で確認を行なった後、右手を上にあげて一本ずつ指さしながら指番号を意識させた。その後、前時で学習をした1小節目と2小節目の運指を確認し、さらに【写真6】のように2小節目の運指は児童に考えさせた。前に出て運指を示した児童に対して「同じです」と前の児童と同じ意見を発言するなど、他の児童も理解ができている様子が見えかけた。



【写真6】ミレドの運指を考えている場面

その後1小節目と2小節目の「ドレミ」「ミレド」の音型を全体で演奏した。演奏後に達成度について尋ねると、学級の約3分の1ほどの児童しか挙手がなかったため、もう一度全体で練習を行った。そうした結果、1回目よりも達成できた児童が多くなったため、次の3小節目と4小節目の指番号について学級全体で考える時間を設けた。まだ学習をしていない小節であったが、1小節目と2小節目で学習した内容を生かし、自分で考えることができている児童の姿が見えかけた。その後、3小節目の「レドレミ」を全体で練習してみたところ、「難しい」などの声が多かったため、児童各自での練習時間を設けた。個人練習の後に達成度を尋ねると、多くの児童ができるようになったと挙手をした。その後4小節目の「ドミド」の練習を行なった。最後に1曲を通して演奏をすると、全体での、音の間違いも少なくなり、児童からも「できるようになった」という声を聞くことができた。最後の10分間で、今までに学習をした指番号について、確認プリントにより習熟度を確認したところ、多くの児童が理解できていることがわかった。児童の振り返りからは、「ドレミの勉強をして、弾けて良かった」「練習をしたら上手になって嬉しかった」などの感想が出た。

— 3 時間目 —

「どれみで あいさつ」を授業の初めに演奏すると、前回よりも「レドレミ」の部分の音がそろっていたことから、児童が運指を習得できていることが見えかけた。

本時では、児童が1小節ずつ練習することができるように、「どれみで あいさつ」を学級の中で4つのグループに分け、グループごとに1小節ずつリレーで演奏をした。この学習により、自分の担当するパートを集中して弾く児童の姿や、前のグループが演奏するフレーズを聴こうとする児童の姿が見えかけた。

その後、ドレミのまねっこの学習を行い「ドドド」「レレレ」「ミミミ」を筆者が範奏した後、児童に復奏をさせたあと、「ドレミ」「ミレド」を同様の形で一人ずつ発表させた。児童は積極的に挙手をするなど、意欲的に取り組んでいた。また、一人ずつ演奏する場を設けたことで、児童一人ずつの習熟度を把握することもできた。「ドレミ」「ミレド」のフレーズでまねっこを

行なった際には、目視により一人ずつ確認を行ない、児童が運指に気を付けて演奏をしようとする姿を確認することができた。

2. 第1学年における授業の成果と課題

本節では、第2学年での授業実践で明らかとなった課題を踏まえ、第1学年の鍵盤ハーモニカを学習する導入時から、児童が自ら運指を考える指導法を实践した。その結果、児童の運指に対する理解力や鍵盤ハーモニカの技能の向上を授業のなかでの目視やビデオの授業記録により確認することができた。また、【資料4】、【資料5】のような児童達の感想からも、本実践の目的の一つである、児童の運指への関心を高めることにつなげることができた。

さらに、「どれみの位置を覚えて吹こう」の題材で取り扱った確認プリントからも、児童のドは1、レが2といった5本の各指とドからソの各音の対応に対しての理解が見受けられたことにより、2年次により難易度の高い教材に移った際にもスムーズに取り組める学習への見通しをもつことができた。

以上のことから、運指を定着させるためには、導入期から教材の進度に合わせた段階的な指導の継続が重要であることが明らかとなった。

☆けんぱん はあもにかを おんきょうしは かんそくを
かいてみよう。

ケンパのゆびばんごうがおぼえられてうれしいです。ひらがなせんせいがいなくなるのがさみしいです。またしょうがっこうにきてもらいたいです。

【資料4】児童Dのワークシート

☆けんぱん はあもにかを おんきょうしは かんそくを
かいてみよう。

けんぱんは-モにかでべんきょうしてこれば、おんきょうしはがわかってよかったよ。ゆびばんごうが/からまてで、てよかったよ。

【資料5】児童Eのワークシート

VI おわりに

本研究では、鍵盤ハーモニカの学習に関する、運指の指導法の一例を提示し、小学校音楽科の授業において実践することで、その効果について検証することができた。さらに、第1学年の授業において、一定の成果が得られたことから本研究で提示した指導法の有用性を示すことができたと考えられる。

一方で課題も残存している。ここでは大きく2点について述べる。

第一に、運指に特化したことで、授業内容が技術面重視に偏ってしまったことである。低学年においては、基礎的な技能を身に付けることも求められるが、まずは児童の音楽を愛好する心情を育むことが大切である。そのため、技能の習得を目指した学習内容と児童が音楽を楽しむことができる取り組み、双方の兼ね合いについて、今後さらに追求していかなければならない。

第二に、本研究において考案した指導法の効果を、第1学年から第2学年といった、本来の

学年順に沿って検証できなかったことである。第2学年を対象にした、2014年度の授業実践は、島根大学教育学研究科の学校教育実践研究の一環として行なった。その実践で明らかとなった課題をふまえ2015年度に第1学年を対象に授業実践を行った。その結果、指導法の効果について明らかにすることができ、第2学年の学習への見通しをもつこともできた。今後は、第1学年から第2学年への段階的な学習の接続を検証することで、本研究で提示した指導法の効果についてさらに追求していきたい。

本稿は、ここまで、運指の定着を目指し研究を進めてきた。しかし、最終的な目標は、運指が定着することにより、児童が音楽を楽しめるようになることである。今後は、技術に終始するのではなく、児童が音楽の楽しさに気づくことができる学習内容について、さらに研究をしていきたい。

【註】

1) ここでラストのいう5指ポジションとは、5度の音域の範囲内の音に、5指を対応させて演奏できる運指法のことである。

引用・参考文献

- 1) 遠藤由美子 (1999) 「音楽科教育における鍵盤楽器導入法の検討 ―音楽教科書を中心として―」『東北芸術文化学会学会誌』第4号 p.81
- 2) 岡本拓子 (2009) 幼小連携を意識すると幼稚園や低学年の音楽活動はどう変わるか』『学校音楽教育研究：日本学校音楽教育実践学会紀要』13, p.265
- 3) 木村みどり・古寺 有希 (2014) 「小学校における音楽の授業に関する報告 ―音楽の授業の指導について―」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』(59), pp.118-119
- 4) 島崎洋一 (1986) 「鍵盤ハーモニカの特質と幼児への指導法」『大垣女子短期大学研究紀要』24, pp.46-65
- 5) 嶋田由美 (2010) 「戦後の器楽教育の変遷―昭和期の『笛』と『鍵盤ハーモニカ』の扱いを中心として」『音楽教育実践ジャーナル』7 (2), p.24
- 6) 下山望 (1986) 『ピアノ運指法 譜例分類による』ムジカノーヴァ, p.1
- 7) 谷村宏子・門脇早穂子 (2012) 「就学前教育としての鍵盤ハーモニカ導入の指導に関する一考察」『関西学院大学 教育学論究』(4), pp.27-39
- 8) 中島一光 (2009) 「指の機能と合理的な運指法による演奏表現の一考察」『研究紀要 鹿児島国際大学短期大学部』(81・82), pp.95-122
- 9) 芳賀均 (2015) 「鍵盤ハーモニカ練習に使用するワークシートの検討 ―自己学習力向上のための簡便な評価法について―」『学校音楽教育研究：日本学校音楽教育実践学会紀要』19, pp.205-206
- 10) 平田千秋 (2007) 「楽器演奏技能修得に関する教材研究 ―鍵盤ハーモニカ・笛について」『音楽教育実践ジャーナル』4 (2), pp.86-92
- 11) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社
- 12) 大和淳二 (1977) 『52年度改訂小学校教育課程講座 ―音楽―』ぎょうせい, p.90
- 13) ラスト, ジョーン (1972) 『ヤング・ピアニスト 学習者のためのピアノ奏法入門』黒川武記, 全音楽譜出版社